
異界にて～

田端

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界にて

【Nコード】

N5896H

【作者名】

田端

【あらすじ】

ごく普通の中学2年生だった西澤美佳いよいよ楽しみな夏休みであつたが夏休み初日の朝、起きたら異世界にいた。しかもそこは不可解な事が多すぎてやたらシュールな世界だった、はたして帰還できるのか？

1話 ここ…どこなの!?(前書き)

注意…異世界とはいいつつ、ブラックユーモア
もありますので現実と虚構の区別がつかない人の
観覧は あまりおすすめてできません

1話 いっ…どいなの!?

「じゃあ」

「うん、明日ね」

彼女は、ただの中学生だ

本当に、普通の女子中学生だ

名は西澤美佳、13歳中2、

普通よりもかわいい感じの

セミロングの女の子である

部活はとにかく遊びたいらしいので特に入っていない

ただし元々運動神経はよい、一時期空手やってたこともあるらしい
実力は確かであり中1の時に中2男子2名に性的な意味で襲われそ

うになったというが

それを撃退したという伝説がある

かわいいけど強くて怠け者だけど

成績は悪くないというのが、美佳だ

さて

いよいよ夏休みだ

中2つたらそれはそれは中学校で

最も楽しい時期だろう

学校になれ、かつ受験はまだ先

そりゃあ勉強はしなけりゃあいかんが

かといってがり勉のようにする必要もちよつとがんばるかってほどでもない

テストもまだ遠いし

しかも帰宅部である彼女にとって

夏休みは天国であった

明日、友である近藤美紗緒と

街中に遊びにいく約束をしていた

ちなみにここは北海道の札幌らしい

真駒内という所に住む彼女、冬は寒い夏はそこそこ暑い

自宅から駅も近いわ学校も近いわとりあえず

快適な生活を送っていた

「ただいま」

「おかえり」

佐和子という中年のわのに若く見える

美佳のお母さんがいた

「あとで通知表ちゃんとお父さんに見せるんだよ」

「はいはい」

特に文句を言われる成績でもないの
で特に気にしなかった

「よお美佳！おかえり！」

「はいはいただいま」

美佳が苦手な人物、兄の徹也だ

ミリタリーオタクで暇さえあれば近くの自衛隊の基地を外から眺めているという

別に美佳自信軍事アレルギーがあるわけでもなく

元自衛官の父や兄の影響もあってかちよつと保守であった

では兄のなにが嫌いか、確かに

軍事アレルギーはもっていないものの

軍事に興味がない、興味がないのに

むりやり押し付けようとする兄を美佳は嫌っていた

ちなみに兄は中3、なぜ妹よりも早く帰っているかといえ

ば：いやさつき帰ってきた

さっそくちかくにあった模型を手にとっていた

「ところで美佳、昨日完成したんだけど

このT-72をみてくれ、どう思う？」

「はいはい強そうな戦車ね」

趣味につっこむつもりはないが

1人で楽しんでくれと美佳は思っていた

夜一

元自衛官、一等陸左の父、辰夫が帰ってきた
自衛隊の定年退職ははやい、その為再就職している

「ただいま」

「おかえりなさい」

「いやあ 今日もつかれた」

その後通知表たるものを見せたが

「お前これだけできるんだからもうすこしががんばればいい学校いけるぞ」と言われた
ぐらいで終わった

一方徹也はちょっとおこられてた

国語と社会の成績はいいが理科と数学の成績がひどかったそうだ

まあ美佳には関係ないし

そんなことも晩飯時にはふっとんでいた

いつのまにか徹也と辰夫はミリタリーの話をしているし

一方美佳は母、佐和子と最近の芸人について話していたそうなの

「最近の芸人ってホントつまらないよね」

美佳がつぶやいた

佐和子はひとことで回答した

「馬鹿にあわせているからよ」

「昔のテレビはおもしろかったのに」

まあ芸人は嫌いでも

最近の歌とかはよくきくそうだ

その後、風呂に入った後

部屋に戻り美紗緒と携帯でメールしていた

「へえ、っでどうするの？」

美紗緒

「ほっとけばいいよ」

美佳

「ダメだよ返事してあげないと後でその男発狂しちゃうよ？」

美紗緒

どうやら美佳は告白されたらしい

時は帰り道、わりとイケメンの先輩に告白されたそうだ

「メルアドは？」

美紗緒

「紙があるよ

とりあえず美紗緒のいうとおり発狂されたら困るからメールしようかな？」

美佳

「でも言葉が思いつかない」

美佳

「そういう時こそ2chよ」

「どうせ気はないんでしょ？安価でokだと思うよ」

美紗緒

「そうだね、じゃあ」

美佳

アンカーとは2chの中のvip語である

アンカーの略であり行動主が、自分がとる行動や送るメール内容を未来のアンカー先に

託し、その通り実行することを「安価遊び」と言う、

また、「安価」をサ変動詞として使用した場合（安価する）、この安価遊びを示すことを示す

なお、「再安価」とは、安価先の内容が不調で再度アンカーを指定することを示す

「…まあ明日でいいや」

その後、時計をみると12時だった
夜に弱い美佳、どうりで眠いわけだ
とりあえず寝る事にした

んで、翌日――

「ん…んん…」

目が覚めたら…それはそれは、自分の部屋ではなかった

「…ここ…どこ？」

理解するのにしばらく時間がかかりそうである

1話 ころころどこなの!?(後書き)

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

2話 はい！？異世界ですって！？

「どこ…どこなのよここ…」

美佳はとまどった

そう、目が覚めたら自分の部屋じゃない

西洋風の木をつかったちよっとお洒落な感じの部屋であった

美佳はまず携帯で確認

しかし…圏外だという

ほとんどの機能が使えない

「嘘！嘘お！どうしよう！」

美紗緒との約束があるのに…

どうすればいいのかわからなかった

その時

コンコンッ

「？」

「起きてるんですか？」

「え？は…はい」

ガチャッ

扉が開いたらそこには
とても日本人には見えない女の子がいた

「失礼します」

メイド服を着た彼女
何者だろう？

「よかった、貴女庭で倒れていたんですよ？」

「に…庭？」

どうということ…？

「あの…ここどこですか！？」

おもいきって場所をきいてみることにした

「そうですか、そういえば貴女、この国の人間
には見えませんもね」

「ここは、ベネルクス王国のベネルブルク城よ」

「！！」

美佳は驚いた、ベネルクスはベルギー、オランダ、ルクセンブルクの
3ヶ国の集合を指し示す名称である

だがこのメイドさんがいった国もなければ
ヘネルブルク城もない

美佳は大声で叫んだ

「日本に帰りたいああい!!」

「にほん？」

「あ、いえ、なんでもないです」

その後、このメイドさんにいろいろ聞いた
名前はニーナ・カセレス、この城専属のメイドらしい

「貴女の名前は？」

「私？私は西澤美佳」

「ニシザワミカ？変わった名前ですね」

それはそうだろう

ニーナ・カセレスって名前事態、フランス語である
しかも日本という国を知らないみたいだから
変な名前に聞こえるのは当たり前だ

現に我々日本人だって外国人の名前をきいたら
違和感を感じるはず、それがもっとひどいバージョンがこの世界で
あろう

「…:そういえば、国王様が貴女に用事があるっていったわ」

「こ…:国王!？」

「私に!？」

「はい」

「はああ…」

美佳はもうこの辞典で緊張する
なんせ面会希望者が国王だというから

「わ…わかりました! わ…私! がんばります!」

「大丈夫美佳さん? からだの動きがぎこちないですよ?」

「ぜ…全然大丈夫ですわ…アハハハ」

適当にごまかしては
いるもののやはり緊張する

こうして美佳は、ニーナに案内されて
国王のいる謁見の間へ向かった

途中には甲冑きて槍もった兵士達がいた

「うわあ…」

「どうしたんですか?」

「いや、世界史にでもでてきそうな人たちだなあって」

「?」

もはや歴史上存在した
兵士だとして美佳は思えなかった

「ここが謁見の間です、国王様はお二人での面会を
ご希望していましたので私のお供はここまでです」

「ふ…ふふふ！二人！？」

「はい」

さらに緊張がます

（ニーナさんついてきてくれるかと思ったのに！）
そう思いつつ扉をあけた

「ど…どうも…」

「…貴女が…異界より召喚させられし者ですな？」

「は…はい？召喚ですって？」

意味不明である

召喚とはどういうことだろうか

「…私としたことが…このようなまだ子供を

召喚してしまうとは…」

「許してくれお嬢ちゃん」

なんか人違いだったらしい

国王の名前はシャン・ベネルクス、この国の国王である

「実は、私の娘であるサラがこの国のテロリストにさらわれて
今私の王位を継承する予定の王子モーリスがサラを助けるべくダ
ンブルクという

テロリストが潜んでいる山中の村にいったつきり一週間帰ってこ
ないのです」

（う…わ、こりやまためんどくさい）

アニメや漫画、小説なんかでありがちな

設定である、そんなことあるわけないと思っていた美佳は

正直鼻で笑いたかったが国王の前なので下手すると肅清される
ガマンした

「ああ！異界にはすごいもっている人がいると

国立の学園の学園長から聞いたというのに…ごめんなさい召喚し
てごめんなさい」

（なんて弱気な国王なの！？）

しょうじき、ヘタレに見えたそうな

…さてよ？こいつが召喚したんだから

きつともどせるはずだよなと思い

美佳は質問してみた

「あの…国王様？」

「はい」

「召喚できるってことは…戻せるんですよね？」

「ごめんなさい…ムリなんです」

「…」

人生＼（＾Ｏ＾）／オワタ

美佳の頭にはこの言葉がたくさんうかぶ
これからどうすればいいんだかよくわからない

「そうだ、あるかもしれないですよ！」

「ええ!？」

あるかもしれない
その言葉だけでもなんか嬉しかったそうなの

「昔のことです、私の父からきいた事なんですが今から64年前
轟音をあげて飛ぶ鳥がやってきたらしい」

「音をたてる鳥…? そんなに泣き声がすごいですか？」

「泣き声というよりうなり声に近いそうです」

「それは満月から突然現れたそうなの…」

「その鳥の飼い主、なんとつい最近まで生きていたらしいですよ」

よくわかんないけど

とりあえずそのかわった鳥にのれば
帰れるらしい

「でも：住処がわからないんですな」

知りたい、元の世界に返れるなら

その鳥の存在を知りたい

どうにかしても聞きださねばと美佳は思った

なので：

「あの！サラお嬢様とモーリス王子様を探してあげますから
その鳥の場所意地でもつきとめてください！」

美佳は意地でもその鳥を見つけ出すべく
自ら危険な任務に志願した

「そんな：危険ですよ」

ベネルクス王も危険と勧告する

しかし意地でも日本に帰りたい美佳は

「お願いします！どうしても帰りたいんです！」

もうかえるためならなんでもしてやるよ

という気持ちであった

そう：かえるためなら：

「そこまでいうなら：とめませんが：

きをつけてください：テロリストは武器でももたないととても太

刀打ちできません」

「そうだ！いい人がいます」

いい人とは誰だろう

ベネルクス王が呼んだ人物はなんと、メイドのニーナだった

「お呼びでしょうか国王様？」

「この少女の護衛を行ってくれないか？」

なんでも伝説の鳥で日本というところに帰りたいために
わざわざ誰も引き受けてくれなかった危険な任務をひきうけてく
れたのです」

「わかりました」

交渉成立、謁見の間から出た

「あの…ニーナさん？」

「なんですか？」

「…ニーナさん、頼って大丈夫なんですか？」

「はい？」

「国王様に私の護衛しろっていわれてましたけど…
強いんですか？」

「ええ、こう見えて私、魔法使えるんですよ」

「ま…魔法!？」

流石に驚いた

ゲームの世界ぐらいにしかない
魔法というものをこのニーナは使えるらしい

「うそくさいですよそんなの！
見せてくださいよ！」

「そうか、美佳さん、日本という異界の国からきたんですもね」

「え？なんで知ってるんですか？」

「だって、こっそり聞いていました」

（と…盗聴！？）

とにかく…美佳は魔法と言う存在が
信じられない、一体どのような魔法があるのか
それは次回で

また、64年前に突如轟音をあげ満月から現れたという伝説の鳥の
正体とは？

2話 はい！？異世界ですって！？（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

伝説の鳥なんて適当に言っしまいました
が
具体的になんなのかはまだ考えていません

3話 この世界

「いいです？魔法には…」

ニーナの説明が始まった
それはそれは長い説明が

「火・氷・雷・水・大地・風・暗黒・神聖・無属・補助・回復という
種類がそれぞれありましてその種類によって効果も違いますし時
には威力も違います」

どこにでもありそうな設定だ

「それぞれには弱点がありますが、無属だけは
どの敵にも威力を発揮します、補助は自身や味方の能力をあげた
りしまして

回復は自身や味方を回復させます」

「これなんてゲーム？」

そういわざるをえない

そこらに売っている

市販のゲームレベルの設定だ

「そして、最後に、さきほど私が言った系統とは違う魔法でして

『召喚』っていうのがあのです」

「現時点で確認できる中で国王様しか使用できませんがこれは

いわゆる召喚獣や異界の人間を自分のもとにワープさせるのです」

「まあ国王様もギリギリ使えるってレベルで失敗することもありま

すが…」

まあ美佳を召喚した時点で
失敗は確実だ

「ちなみに私はその中の風の使い手で
さすがにでっかいのはムリですが竜巻起こせますよ？」

自信ありげに迫るニーナだが
美佳はそれを信じようとは思わない

「ホントなんですか？じゃあやってみてくださいよ」

「そうですね…」

ニーナがふとふりむくと
ガラの悪い人たちがいた

「あっちみててくださいね」

「？」

その時、ニーナは手を構えた
魔法というよりはこれから
格闘技をする感じだ

「はあっ！」

「掛け声男くさ！」

だがその時、小さい…といっても
3〜4メートルはあるものの竜巻が生まれて
ガラの悪い人たちのほうへむかっていった

「ぎゃあああ!」

「…」

ぽか〜ん

「ねえ!」

「そ…そうね…正直すごいよニーナさん」

こんな非常識な事ができるとは

流石に美佳は関心した

だが…よくわからない

深く考えないでもこれはシュールだと思った

さてさて、お二人はその後王都ベネルクス

に訪れた、白いレンガや赤いレンガでできた美しい家

が立ち並ぶその街はまさに中世ヨーロッパといった感じだろうか

…いや

「いらっしゃい! ラジオなんかあるよ!」

(以外と近代の技術もってた!!?)

この世界では最近開発されたというラジオなんかあれば
港を見れば蒸気船もあったり、兵士は刀や槍のほかにも火縄銃やマ
スケット銃

とも違う古臭いがわりとまともな小銃を装備していたりと
どうやら思っていたよりも近代的であるようだ

ただし兵士が甲冑きているなどいがいと古い感じではあるが

中世十近代といった感じだろうか

「あの? なにか食べます?」

そういえばそろそろお昼時である

「う…うん、そういえばおなかすいたね」

「じゃああそこへいきましようか」

つとニーナに案内され

たどり着いたのは喫茶アルベールという所だ

中に入るとパンやらスープやらの臭いかぷんぷんする

「いらっしやいません」

店員もやたら多い

客も多い

「フランクパン2つとハンバーグ2つ、あとスープを
お願いします」

「かしこまりました」

…待つこと1分

「お待たせしました」

「は…早!？」

「ここはね、ベネルクスで最初のファーストフード店なの
なんでも向こうの大陸にあるアメリカンって国で人気らしいわ」

（ふぁ…ファーストフード!？）

なんとこの世界

日本より遅れているらしいが

それでもファーストフード店が存在しているそうだ

どうでもいいがこのフランクパン、どうみてもフランスパンにしか
見えないのは美佳だけであろうか

（これ…フランスパンよね…そうだよねこれ絶対そうよね!？）

自分で考えてもわからないので

ここはなにかと物知りである

ニーナにきいてみることにした

「あの：フランクってなんですか？」

「ん？ここより南にある大きなお国ですよ」

「なんでも悪い王様が治めているらしく一週間前にお隣のローマニヤ王国へ

攻めにいって失敗したわ」

「ローマニヤ？」

「一時は帝政だったみたいだけど革命が起こっていまは王制よ
：といってもこのこと同じく立憲君主主義国家らしいですが」

名前からして現実世界でいうイタリアに相当する国家だろう
どうでもいいのだがここに立憲君主主義の国家があるとは
美佳は思ってもいなかった

「ローマニヤって個人主義者ばかりで侵攻するときあまり強くないのですが

防衛戦になると心が一つになりますのもものすごく強くなるんです」

兄、徹也が言ってた事と同じである

たしかにイタリアは進攻よりも防衛のほう強い

：ベネルクスがベルギー・オランダ・ルクセンブルクで
フランクがフランス、ローマニヤがイタリア、そうすると美佳は
残りの国家の名前もきになった

「あの：後はどんな国家があるんですか？」

「そうですね、ここ欧州だけでも結構あるわ」

「ここより東にあるプロイセン帝国でしょ」

プロイセン：名前からしてドイツだろう

「さらに東のモスクワ大公国、プロイセンの下のハプスブルク帝国
あとは：プロイセンとモカクワの間にあるポルスカ共和国

そして島国だけど亜州のほとんどを制したブリテン王国があります」

どれも聞いた事ある言葉
ばかりの国名だ

さらに亜州とよばれる美佳のいた現実世界という
アジアに相当する州があるそうだ

そこはブリテン王国という国が大部分を占領しており
本土とその周辺の島、大陸の一部と太平洋の島赤道付近までの大部
分を領土とする

大東亜帝国という国だけが発展し根強くブリテンと戦い続けている
という

一方現実世界という北アメリカ大陸には赤道以南の太平洋と大陸南
部を領土とする

アメリカケン、北にはなんとそのまんまカナダが存在する

南アメリカ大陸は未開の地であるらしい

この世界の列強というのはニーナがいうかぎり

フランク・ロマーニャ・プロイセン・モスクワ・ブリテン・アメリ
ケン・大東亜の七カ国だ

ニーナがいうにフランク、ロマーニャは国民性からか戦争向きでは

ないものの

いざとなれば強い、フランクにかぎっては王が圧制で無理やり押さえつけている

プロイセンは数は少ないものの技術が最も発展した国で

この世界で始めてラジオや性能のいい銃を開発したそう

モスクワとアメリカンは質よりも数という感じで

最強の陸軍を持つほか、大東亜帝国との戦闘も視野にいれ海軍の戦力を増強中との事

またモスクワは金決だったりアメリカンはかなり裕福だったりという特徴もある

ブリテンと大東亜は島国だが広大な領土を持っていた

特にブリテンは始めて蒸気船を開発、大東亜もそれに送れぬよう独自で開発

両国は国境を争いたびたび戦争となる、両国ともこの世界で最大規模の海軍力を誇る

この世界では、ベネルクスのような小国は

未だちょっと中世が残っているもののブリテンなどの列強国は近代化が進み

少なくとも日露戦争〜第一次世界大戦時の技術はあるという

(美佳曰く)

ただし、航空機についてはライト兄弟のような人たちが現れず

存在しない、一応計画はあり大っぴらにも公開されていた為

民衆の多くは知っていて「人乗る鳥」という名で一時期はやったそう

まあ、そんな話をそれでも美佳は興味なさそうであったが：
ただしニーナとの会話でわかったことはこの世界はすくなくとも
日露戦争〜第一次世界大戦レベルの技術がありちように帝国主義が
活発である時期であるらしい

さらに美佳はきいた

ほかにもこの世界の人が開発したものってなにかあるって

また兵器なのだが

戦車と自走式で銃弾に耐えうる装甲と大というほどでもないが砲を
装備したものが

ブリテンとフランク、プロイセンが開発に成功したらしく
すでに実戦部隊に配備されているという

まあ、美佳は興味なさそうだ
ただ予想以上に進んでいたので驚いてはいた

「ふう、おなかいっぱいです、ありがとうございます」

「いえいえ、ファーストフードは安いですし、さ、ダンプルクへ向
かいましょ」

「はい」

3話 この世界（後書き）

ご意見、ご感想などお待ちしております
なお国名については実際の地名や歴史、小説
なんかからとっています。

4話 真理教

さて、王都ベネルクスを出た二人はひとまず最初の宿泊予定地であるユトレヒトという町へ向かった

「!!」

美佳は驚いた

どうせ徒歩での長い旅になると
思っていたのだがなんと鉄道があったのだ

「こ…これって鉄道よね？」

「そうですよ？」

「ずいぶんとまあ…近代的ですね」

「まあ産業革命っていうのも終わりましたし」

ただし鉄道路線はプロイセンとここを結ぶのがひとつしかない為
国境付近に存在するアベルラントという所で降りてそこから

ダンブルクへ徒歩でいかなくてはならない、また鉄道事態巡航速度
が60キロぐらいなので

そう遠くまではいけない、本数も多いとはいえないし遅れることもあるので

それを考えて近くのユトレヒトを目的地に選んだ

「まもなく一番線よりケールン行き普通発車いたします」

その語、駅員がドアを閉めに来た
どうやら自動でしまるわけではないらしい

これも遅れる理由なのでは？と美佳は思った
まあ、秒単位で動いている今の日本の鉄道が
正確すぎるといえば正確すぎるが

「本日はご利用頂きましてありがとうございます
この列車は普通、ケールン行きです、各駅に停車します」

しばらくすると田園風景が広がる

その時

ガララ：

「えっ！？窓開くんですか！？」

「え？窓ってあくものじゃないんですか？」

最近の鉄道車両は窓があかないようになっていた
その世代の鉄道車両にしか乗った事のない、いやあっても精々路面
電車か地下鉄ぐらい
だと思っていた美佳にとって斬新であった

「そうなんだ、普通の列車も窓が開くんだ」

まあたしかに窓をあけたらいい風が吹く
風景もいい、なんだかんだで和む列車の旅だった

50分ほど後―

「ユトレヒト、ユトレヒト、降り口は右側です
お忘れ物のないようご注意ください」

しばらく列車に揺られていると
どうやら目的地へ到着したらしい
ドアがあいて二人は下車した

「ふああ…なんかつかれた」

「それは列車にのるだけでも疲れますよ
だってあまり乗り心地よくありませんもの」

駅舎は大変立派なものであった
中世ヨーロッパ風の造るのに
やたら時間をかけそしてやたら金をかけたような

こんな郊外の町まで美しい
この国は財政的に裕福であるらしい

町も美しいレンガ造りの家が立ち並ぶ
王都よりも新しく開発されたらしく
王都よりもきれいだ

「ん？」

「どうしたんですかニーナさん？」

「えっ？ いや、たまたま指名手配されてる人の

顔写真がはってあったので」

「カメラあるんですか？」

「ええ」

あっても不思議ではない

少なくとも日露戦争〜第一次世界大戦レベルの技術はあるのだ

（…あれ？この人見た事あるなあ…？）

美佳が知っている人物に
似ているらしい

しかし名前が思い出せない
その時

「駅に毒ガスが！」

「え！？」

突然毒ガスがまかれたらしい
さかもさつき利用した駅である

「ちよ…ちよっと大丈夫なの私達？」

「さあ？でも大丈夫よ、私たちが去った後ですから」

会話をしている彼女たちの
横を兵士達が叫びながら走っていった

現代視点からみればお古の銃を持っているが
中世風の風景のなかあんな武器をもって走っているほうが逆に不自然だ

それに何故だろう？ 甲冑はきていない

「あの？ ニーナさん？ あの人たち甲冑は…？」

「ああ、甲冑は軍服不足でどっかからひっぱりだしたもののらしいですよ」

「へっ？」

「第一あんなの着て長時間戦えませんよ」

（ええええ！？ 中世ヨーロッパじゃないやん！）

中世の面影はどうやら建物ぐらいらしい
あと現実世界との大きな違いは魔法というものが存在する
国名、国体が微妙に違う事だろう

「おのれ！ インコ真理教め！」

「イ…インコ？ まさか！？」

「知っているのですか？」

「私の国のカルト教団です！ サリンばら巻いたり弁護士殺害したりと
いろいろ迷惑かけてました」

「まさか！あさはら亜袈覇羅もこの世界にいたりするの！？」

本名、松本、通称、あさはらしやうこ亜袈覇羅諸卯子卯は

まあ説明するほどでもない、でも死刑囚のあの人とは関係ありません

美佳は覚悟を決めた

こういう展開の場合主役らが

事件を解決するのである

とりあえず戦う覚悟、死ぬ覚悟はきめた

（やってやるのです…）

…だが

「じゃあ宿、いきましようか」

「ええ！？戦うんじゃないんですか！？」

「大丈夫です、しょっちゅうなので軍隊に
まかせておけばそれで解決です」

覚悟の意味は？

一気に溜めた気力がどこかへ…

夜一

（でもなんで亜袈覇羅が…）
（まあいいか）

4話 真理教（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5896h/>

異界にて～

2010年10月15日22時18分発行